

吉川宏志の『海雨』の歌

今回は、吉川宏志さんの新しい歌集『海雨（かいう）』（二〇〇五年一月刊）から幾つかの歌を紹介しようとおもうのです。『海雨』は吉川さんの第三歌集です。第一歌集『青蟬』（一九九五年刊）が評判になったのを覚えています。あれから十年が経ってしまったのです。その、『青蟬』では、次のような歌が、記憶に残っています。

あさがおが朝を選んで咲くほどの出会いと思う肩並べつつ

『青蟬』

これは、どういうことを歌っているのでしょうか。「肩並べつつ」というからには、誰かと「肩」を並べて歩いているのでしょうか。まずは、恋人と一しよに歩いていると考えていいとおもいます。「出会い」といっていますから、二人の「出会い」を歌っているのです。では「あさがおが朝を選んで咲くほどの」とはなんでしょう。

「…ほどの」というのは、比較をあらわす表現で、「…のような」「…の如き」といったことばと同じように受けとっていいとおもいます。では「朝顔が朝を選んで咲く」とは、なんでしょうか。

こういう、比較（比喩）をあらわすことばは、ほかのことばに言いかえてしまつては味がなくなるので、このまま、感覚的に受けとっておくのがよろしいでしょう。「あさがお」が朝咲くのは、あたりまえのことです。しかし、花は「朝を選」ぶのかどうかといえ、これは人間が、そう解釈したということでしょう。作者のたくらみに、この「選んで」というところにあり、いわば、花に対してあたかも意志をもって「朝」を選んだように見立てたのです。ということとは、自分たち二人の「出会い」もまた、あさがおが朝咲くような自然さと、その自らの経緯（おのずか）のなかにも一点見逃すことのできない「選」びがあったといっているのだらうとおもわれます。

さて、このように、ある意味で技巧的ともいえる歌から出発した吉川さんなのですが、今度の『海雨』では、多少、きこえない感じ



もするぐらいに、正面から、ふつうのことばで歌っている歌が目立ちます。わたしは、それもまたこの作者らしいとおもっておもしろく読みました。たくさん連作が、この本には入っていますが、その中から「顔面」というのを選んで読んでみましょう。

謝りに来いと言われてナナフシのごとく立ちいつホテルロビーに

あらかじめ決めし言葉に謝りおり革靴の尖黒く見えつつ

「誠意」とは結局金のことならむ十万ならば出すと告げたり

金額をあらわにすれば怒りいし人が卑屈な表情を見す

顔面の力で男は断るなり河の明かりにさらす顔面

なにか、仕事の上のことで、ある男に「謝」らなければならぬ状況になったらしいことがわかります。吉川さんは、教科書や副読本やそういった教育教材関係の出版社につとめているように聞いています。たぶん「顔面」の一連は、会社を代表して、だれかに謝罪をしに行ったときのことを歌っているのでしょう。だれか、ではなく、ある組織か、団体に謝りに行ったのかもしれない。

一首目に出てくる「ナナフシ」は、ナナフシ目の昆虫で、体は「植物の枝や葉に色、形ともに似て、翅は短いか、ない」（『大辞泉』）というので、昆虫好きの人ならだれでもしっています。「ナナフシのごとく立ちいつ」というのは、自分の姿勢や態度や心理をナナフシになぞらえているので、ユーモラスであると共に、素直に謝っているわけではなく、ある交渉に臨んでいる気分であることを示してもいます。

二首目の「革靴の尖」は、相手のはいている靴で、目線を下げてあやまっているときに、靴の「尖」がみえたといっているのです。

三首目四首目は、説明を要しません。こういう形の、抗議とそれを受ける場面、そして「金」で解決していく過程は、いやというほどたくさんあります。しかし、この一連のように、作者の怒りと、理不尽でありながら、一応あやまっておいた方が無難だという現実と、その場に立たされた自分をなさけなくおもっている気持ちと、それらを丸にして数首の歌によって言いあらわした歌は、そうたくさんはないとおもいます。

吉川さんは一九六九年生まれですから、三十年代半ばの青年といつてよく、この一連には、その年齢相応の正義感が、うっ屈した表情をまといながら出ています。五首目の「顔面の力で男は断るなり」というのは、自分のことを言っているのか、相手のことを言っているのか、どちらにもとれますが、窓の外の「河の明かり」が映っている相手の顔を、まずは考えてみるべきでしょう。

連作の後半の四首は次のようなもので、交渉のあとの状況と心理をうたっています。

比良の町雪のなかから生えている小さな橋をわれは渡りき

捨て雪の積み上げられし路地を来つ鱈大根を食わむ食いたし

黒板に（なまこ）と書かれる店に人のすきまを見つけて座る

くちゆくちゆく輪切りの海鼠（カキ）噛みながら（吉之川）とう酒に親

しむ